

渡辺洋平氏の発表についての

## 質疑応答

(質問者 1 名)

### 【質問】 佐藤義之 (京都大学)

○ベルクソン理解については適切であると思います。しかしその一方で、次に述べるような二点で不満を感じました。

○ベルクソンの倫理学のカント倫理学との比較が主題ですが、この比較によって何が得られたのか、という疑問を感じます。

発表者はベルクソンが道徳に未完の進化するものとしての性格を見てとっていると指摘するわけですが、この性格はカントとの比較をせねば分からないようなことではないでしょう。だとすると何のための比較かという疑問が生まれてしまいます。そういう疑問を抱かせないように、カントと比較することによってしか明らかにならないベルクソンの特徴を指摘するとか、あるいはそこまでは言えないにせよ、比較という手段をとらねば明らかになりにくいようなベルクソンの特徴を取り出し、論文の成果として示してほしいと感じました。

○また、発表原稿 7 頁の「終わりに」の第二段落にあるカントについての言及についても疑問を感じました。

ここで発表者はカントとベルクソンの「鋭い対比」に言及しますが、どこにその「鋭い対比」を見だしているのかがわかりにくく感じました。発表者が本発表で最も注目するのは、その次の第三段落でも触れられているように、ベルクソンにおいて道徳が進歩へと開かれていることです。したがって、カントにおいては逆に道徳が「できあがった状態」(4 頁 6 行目)であることと対比させたいのだろうと推測したくなります。しかし、第二段落のカントからの引用はそのような論旨とは読めません。

そういう意図でなく、動物と人間の比較に関して両者を対比する意図なののでしょうか。しかしそう考えても、カントの引用箇所の真意は人間の理性が動物の本能にとどまらないという主旨と考えられますので、開かれた道徳を動物性を超えるものとして称揚するベルクソンの意図と比べたとき、ベルクソンとの「鋭い対比」をなすものとは思えません。逆に一種の類似性さえ示しているように思えます。

結論部分であるからここは本発表の成否がかかっている議論です。それだけ慎重を期して対比の基準をわかりやすく示し、議論を整理して下さい。

○最後に、いくつか細かなミスを指摘しておきます。

- ・2 頁第二段落最初の行「道徳哲学との比較しすることを」→「道徳哲学と比較することを」
- ・4 頁下から 6 行目「気まぐれしたがいい」→「気まぐれにしたがいい」
- ・7 頁第二段落引用の (DS141) という引用箇所は誤りではないでしょうか。典拠としたという Worms 版の 141 頁に同内容の文がありません。
- ・おなじ 7 頁第二段落の引用中の「実創造的進化」は何かの間違いではないでしょうか。直上に述べたように、原典参照箇所が分からないので何の間違いかは分かりませんが。

**【回答】 渡辺洋平（関西大学）**

ご質問いただきありがとうございます。ご指摘いただいた点は、本来であればきちんと論じたいと思っていたのですが、様々な事情が重なり不十分な発表となってしまいました。以下、ご質問に回答することで私の意図を明確にできればと思います。

まず 1 点目の「ベルクソンとカントの比較によって何が得られたのか」という点に関して。

私が論じたかったことはまず、一種の命令としてあらわれる道徳は、ベルクソンにとって動物ないし生命一般との連続性を明かすものであるということです。命令ないし責務という状態で作用する道徳は決して人間に特殊なものではなく、むしろ生命一般が共通して持つ特徴であること、そしてそれは社会を安定させると同時に「閉じた」ものとする、これがベルクソンの道徳論の第一の側面であると思われます。カントと対比したのは、人間を進化の線上に位置づけ、古来より人間性のしるしとされてきた人間知性それ自体が進化の途上で獲得されたものであるというベルクソンの立脚点がより際立つのではないかと考えたためです。周知のように、カントは『実践理性批判』の末尾で頭上に輝く星空と内なる道徳法則への賛嘆の念について語っていますが、そこに端的に見られるように、カントにとって道徳法則とは人間を動物と断絶した知性的存在たらしめるものでした。もちろんベルクソンが論じる責務とカントが考えている理性の命令を単純に同一視することができるのかという点については議論の余地があるでしょう。ですが、命令として現れる道徳の位置づけにおいてカントとベルクソンはほとんど正反対と言ってもよい立場にあるように思われますし、カテゴリーそれ自体の発生を問わなかったというカントへのベルクソンの批判は、道徳法則の発生という観点についてもそのまま妥当するよう思われます。

またベルクソンには、人間は理性的な議論によってはかならずしも説得されないという理解があるように思われます。どんなに筋の通った論理であっても、それだけでは人を動かすには十分ではなく、むしろ真の道徳とは、他者に呼びかけ行動へとつながるものだとい

う点にこそ、ベルクソンの道徳論の独特なところがあるように思われます。そしてこのような呼びかけによって作用する道徳こそが開いた道徳ないし動的な道徳と呼ばれ、開いた社会へと至る道の途上に見出されるものです。道徳における理性の位置づけないし重要性という点においても、ベルクソンとカントの視点は大きく異なっていると言えるのではないのでしょうか。

次に2点目のカントとベルクソンの「鋭い対比」についてですが、ご質問にもあったとおり、カントもベルクソンも道徳性がある意味では動物性を越えうるという点では一致していたと思われます。しかし私が強調したかったのは、ベルクソンにとって開いた道徳ないし動的な道徳によって開いた社会を生みだすことは、人間という種すらも越えていくことだという点です。人間性をことさらに称揚するのではなく、むしろ人間知性それ自体が本来的に持つエゴイズムを指摘しつつ、それを越えていく可能性を見ていること、これこそが私が主張したかったベルクソンの独自性でした。つまりカントが人間の理性の内に動物をこえた人間性を見ているのだとしたら、ベルクソンが語る開いた道徳・開いた社会とは、生命によって措定された人間という種それ自体を超えていくものなのです。したがって、人間の人間たる部分を称揚するカントと、人間という種自体が乗り越えられていくべきだというベルクソンの対比こそが、私が描きたかったものです。

またベルクソンにとって閉じた道徳と開いた道徳の差異は、単純に言えば、その対象が閉じた集団か人類全体かという点にあります。人間は生物の一種であるかぎりにおいて、どうしても前者への傾向を備えています。そのような傾向を乗り越え、人類一般への愛を説くことこそが動的な道徳の特徴であるとも言えるでしょう。自分の家族や社会、さらには民族や国家を越えた集団や社会を思考することは、ベルクソンが生きた時代に劣らず、今日でも差し迫った課題であるように思われます。もちろんベルクソンが、人類全体を包含するような社会の到来を楽観的に考えていたということではありません。むしろ彼はそのような可能性を明確に否定してもしました。しかしだからこそ自分たちの社会の未来をどうするかということがわれわれにとって重要な問題となるのではないのでしょうか。本発表における私の根本的な問題意識はそのような点にあったのであり、ベルクソンの道徳論はそのための示唆をいまなおいくつも与えてくれるように思われます。

最後に、ご指摘いただいた7頁第二段落引用箇所についてですが、これはDS 99の誤りでした。また「実創造的進化」というのは単純に「創造的進化」の誤記です。お詫びして訂正いたします。